先進繡像玉石雜誌

禮

續 三

和書門
類 一六〇二四
號 二二九
函 一一
架
冊 二〇

内閣文庫
和書
類 一六〇二四
號 二〇
冊 一一
函 五八
架

史傳載紀

新

内閣文庫
請號 和 16024
冊數 20 (13)
函號 158 211

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

翌廿日、加藤駿河守昌賴、京美濃守虎盛五十八歳
虎盛を呼び、晴幸と共に、長尾景虎の軍術を商量致し
居る、晴幸申け敷は、景虎の父、長尾六郎為景越中國千檀
野へ討死せし時、景虎十三歳なる姿を臥て似し奥
羽列侯を廻り、上杉より關東諸家の城下を廻る、十四
歳の時、越後へ歸る、姉婿長尾越前守政景と軍せしが、政
景の兵六千、景虎の勢は二千なる、然共景虎遂に切勝
て政景降參せし、傳聞鎮西八郎為朝は、十三歳にて
父為義の不興を受、豊後國に下向し、大小廿餘度の軍共
に、十五歳の時は、九州を打從へ、とかや、更に劣らぬ
勇將なり、身の健なる、差掛る大軍を廻さぬ氣

質と見えく。屈伸の道理を、勇心付ぬ處有るべし。去て此後何時も旗本と手合く、力戰をく有無の勝負を決せんと為ふ為るべし。扨方みくを、陣法を堅固に扱ひ、鳥雲の変化屈伸の自在を以て、始終の勝を肝要ふ為と、理明の詞約ふ演ぶ。何も扨義の同じけ是

扨靜夜話の謙信、河田豊前守に語りけるは、武田信玄を六ヶ国の勝を常に金を勝とく。七分八分に終に、世ら也は、閑夜に今度は、拙任の要害を一日に乗取、殊に城を剛強と聞れ、長尾前守兄弟を討取、其上信長勢五萬の陣所大聖寺へ前廉、案内を云、武方より仕掛追崩たるは、十一分の大勝ふく。先々今度は歸陣

最ふに、信玄ふらは、何とく。扨任の城落ちく、大聖寺の陣へ仕掛ゆさ為を、武分の吾等信玄の及ぶ処ふ是を云々。又狩崎直江の語らをけふに、信玄は軍の鍛錬深き老將ふく生間、對陣の勢ふく常の如く、術を為物ふらは、何と為くも、備の違とふ為を、備遠き為處へ、扨方より無理の仕掛をく必負るの、扨も能侍を良く、亡きかの二ヶ為に、唯少人數ふく、輕く働く遁間もあるに、信玄と、手ふ手を取組、臥く首を取の、指違るの何也手詰の勝負をせんと覺悟をと云芸、信玄、立文芸賢き大將ふく是を悟ふ、成程、靜ふく、荒勝負ふ遇をと為ふ是、信玄、謙信両雄の分ふく晴幸の見く處一竜

ゝ錆たる人を識り鑒明らかなるを形容
サシ日景虎陣拂ひて越後へ引還せば鼠宿の仁科上田
の海野浦野を掠め麻績會田青柳等悉く人質を入れ降
参を請信朝長出を小室内山両城へ籠せ八日に甲府へ
凱陣あり同十七年六月晴信朝長諏訪へ進發せらるる高
遠の城を攻んと擬せらるる如く景虎小縣へ出張の由
注進あるしかゝ直に高遠を指さず和田峠を打越長窪を
東北に打て内山城に入る處を以て本陣とす景虎も進
て戸石に陣を張六月四日より牛曲川を渉て長駕迫
合を挑むと云共晴幸かたく諫て陣法を堅固ふ鎮め
隊伍を亂さず景虎遠慮を廻らし十六日の辰の刻に至

り諸手を乗廻し速に人數を収め陣を拂ふ是を甲列勢
の咬留んと追駆来らゝ地理善処に引後く有無の一戦
をと策りの如く晴幸景虎の術を早く推知せしかゝ警
も動の体見ぬ由にて居くりけり
魏の征東將軍滿寵呉の軍兵合肥を攻んとせるを
聞魏へ表を上り兵を益んとを乞然る呉兵を收め
て引退く寵おもふ様らく賊大に攀て寄来り甚忽て
退還る是其本意に非ず此必偽退て我兵を罷を倒還
虚に乘し不備を掩そんと呉もらんと云て兵を益さと
を止む後十餘日果して呉兵来攻む共寵の軍備ある
か故に勝ちと能くと云り晴幸兵法に通暁とること

影神の如し。満髭ふ信ること萬々と云へり。
景虎越後ゟ引還し、諸侍将を集め、評定いけふゝ弱を示
さ、要害ゟ誘き撃んと謀りけふ、両度ゟ及ぶとも
甲列勢備立嚴重ふしく、術ふ乗とかし。今度ゟ木曽ふ笠
原と牒し合を、潮尻邊ふく軍を持を戰既ふ酣ならん時
我川中島へ打ち出ず、両科を切取んと裏ゟ中の物を探
ふくからんと群議決着し、木曽ふ笠原へ使節を発たく
七月上旬諏訪へ働くべしと約束を固めゝゟ。然るゟ晴
幸戸石を景虎ゟ引退く時より我腹心ゟ者を両三人商
人ゟ作り立て、越後國ゟ遣し置けば是等ゟ方便落ふ
かく聞定め晴幸ゟ告知せゟ。晴幸ゟ色を晴信朝臣ゟ

告ふゟ内々用意をそ為ける。斯ふ處ふ七月十六日諏
訪ゟ陣代板垣弥次郎信里、伊奈木曽ふ笠原三人ゟ軍兵
一万餘人潮尻、荒砥原へ打ち出ぬ。是ゟ一定當城へ寄ん
とゟ儀ふくゝへしと我注進さゝけふ。甲列ふくゝ思設し
て方色ゟ六千餘騎を引率し、十八日ゟ卯刻ふ潮尻嶺ふ馳
着。先里甲府より里潮尻嶺ゟ至る。廿里ふ遠。然ふを一晝夜ふ駆
し、越後ゟ便宜を待く。未出陣せぬ潮尻荒砥原ゟい寄合
ゟ諸軍勢ゟゝ方里ゟ色ゟ右往左往ゟ周章て、甲列勢長途
の疲を屑とゝせず、潮ゟ偏ぶ如く推寄、思々ゟ分捕て信
濃勢散々ゟ打負、討死ゟ八百七十二人ふ里。越後ふくゝゟ
相ゟ味方ゟ軍議ゟ漏た分ふからん。然ゟ發向ととゝ功あるへ

から伏、とく、川中島へハ出ヒ給ふ事ハ晴幸・景虎乃軍機を
同十八年四月十二日深志居城ゟ乃ハ長時乃拠本伊奈木曽之方
乃軍兵動き出ヒ諏訪乃境を侵し殊乃去年景虎と諜合
潮尻・拮梗泉へ打出大望し意趣を聞へ〜とて甲府を打立
十三日諏訪へ到着あるく爰ゟく三方乃ゟ有ル晴幸
ゟ後利武部少輔・馬場民部少輔及び是軽大将安間三右
衛門尉と共ゟ伊奈乃向ひ軍ゟ晴幸次第と定めらるける
處へ景虎八千餘騎ゟく小縣へ打出飯富虎昌ゟ内ひ乃
城を攻ゟ出開ゟけ出ハ廿六日諏訪より是ゟ諸へ進發せ
ら新諏訪より是ゟ諸景虎ゟ飯富虎昌ゟ八百餘騎乃切崩
さ出矢澤乃奥へ引退きけるゟ晴信朝臣ゟ諸へ着陣あり

ハ乃出を聞海野平乃陣を取五月六日使者を立て景虎
信州へ打出ると両科乃地を領せんと貪んあるゟひたひ
元来武田乃家ゟ意趣骨く是ゟ但村上義清ゟ頼ゟ出さ
取乃弓箭ゟひ甲斐信濃越後之國乃民を苦め互乃鎗を削
鋒を爭ひ永く怨讐を構鄰國乃好を破ひく何乃詮ゟハへ
き願ハくハ義清を葛尾へ返さ出本領を安堵仕ひ捩乃御同
心ひく三國乃民乃喜ゟひ若御同心ち出無ハ景虎止と
を得ひ御陣ゟ駆入討死仕へきハとやけ出ハ晴信朝
臣晴幸と評議有く答ゟ義清ゟ頼ゟ出度々當國へ
御出張乃条筋ゟ神妙ゟ覚えひ但葛尾を村上乃還ち中
へきと乃御談を更乃其意を得中さひ譬ハ越後國ハ元来

国立公文書館
National Archives of Japan

ゐ上杉民部大輔憲顕尊氏將軍より守護職を賜たまさく
侯へハ代々其子孫ゐ傳さく山内乃家ゐ呼務さくけひいまと
ゐ何ものゐ山内乃家衰ゑ後ゐ御ゐ乃領とゐまさくハ文能登
越中乃國々ゐ元ハ長尾乃領國ゐらぬを其本主へ還させ
給ふさくゐれとハ様かゑ里義清ゐ知行しくけゐ葛尾ゐ
元ゑ原底ゐ附大ゐ處ゐさく曩祖武田伊豆前司信光入道光
蓮ゐ時より里以来總領ゐ傳さる里たる呼領ゐ里別しく晴信ゑ千
代乃先祖陸奥守信武尊氏將軍と共ゐ武家中興乃運を開
かゑし時甲斐信濃乃源氏乃大將軍を賜くけへハ兩國ゐ
使武士乃進退を掌ゐ武田乃家ゐ付たゐ恒規ゐ里義清
ゐ跋扈自立乃色を顕さし久しく當家乃式目を受をけゐ

勘發を加えんと欲さくけへハ弓箭を取さく對抗せしゐより里
侍共を差向さくけゐ遂ゐ悉く城を指さく其國をも落ゐし
ゐ里去運怯く道理ゐ暗さく義清を何ゐ葛尾へ歸しくへ
けへさく討死を好さゐ里ゐとゐらハ御入けへ軍兵とゐを出し
さく御介錯ゐ充けへしけ方より里軍ハ始ゆ終ゐ里と返辭
さく使者を還さゑしかハ十日乃早朝ゐ景虎さく使者を
立さく景虎越中能登乃間へ出陣仕へきとのけ兵今此表
陣拂けゐ里ゐ御墓ゐ有ゐ面くハ何呼ゐさくゐ還し合けさん
と申さく其日乃午刻ゐ引退く是景虎と對陣晴信朝臣ゐ
八月朔日甲府へ凱陣ゐ里さく十八日巳刻ゐさく上野へ發向
せらゑ武義上野乃據神流川ゐさく押詰近郷を放火し侍

不永敵出會ハい晴幸生回・碓氷峠乃切所を踰不知案内の
敵地ハ星輕々敷備を離也働色々すと諸手を諫め軍兵
を纏ふく引還さんと せ一如乃安中越前守和田・倉賀野以
下六千餘人蕪川乃代方和田城乃搦手ニ寺尾ハ陣を取
九月ニ日内藤昌豊馬場景政原昌俊同昌勝滝利信音小
宮ハ昌友と合戰を挑むと云共晴幸よく陣法を調練ふれ
ハ隊伍亂ル進退常ハ星上野元遂乃手負五百廿七人討死
せ去ハ此序乃倉賀野上野・羣馬郡・倉賀野・岩乃西ハ古城
跡ハ星東西三十五間南北五十間
倉賀野・河守乃舘ハ星倉賀野氏ハ・児玉黨ハ和田同上
く狭ク行高乃ハ倉賀野三郎高俊を祖とし
郡・高崎乃離乃下ハ和田村ハ星和安中同上碓氷郡原市村
田右兵衛大夫信輝乃城跡ハ星
星大永五年安中尤迎忠成
松井田ハ星新發田住人出羽守忠

親乃城を等乃城々を攻落さる色々と評
樂ハ星ハ屋城と野ハ
定區々ハ星ハ処へハ星原長時下諏訪へ出張せ敵ハ
乃色ハ安中を指ス諏訪へ發向ハ星ハ共長時出陣せ
星去ハ乃十一月ニ日甲府へ凱陣せらる同十九年ニ月景虎
殖科郡地藏峠を打越佐久郡へ發向せ敵由所候乃兵追
出ひ乃晴信朝長乃末曾ハ星原を攻んとく陣を取く坐
拵捗原へ注進せ一ハい晴幸さらハ深志小笠原長時乃城乃路を
押え置青柳麻績を馳越猿馬場乃ハ星大業原より星川中
島乃打ク出越後勢乃後へ廻星く攻やらハ景虎何乃猛
出と云共推付を見せくハあるへくと評定ハく同十一日
飯富兵部少輔虎昌ハ本乃先手小山田備中守ハ左乃先

手、真田彈正少弼幸隆ハ信玄先方ノ諸侍ヲ合セテ中備トナシ、左馬助信繁、穴山伊豆守信君ハ旗本ノ先備、馬場民部少輔、内藤修理亮、浅利式部丞、日向大和守ハ左ノ脇備、諸角豊後守、甘利左衛門ハ小曽禰沢ハ左ノ脇備、栗原左衛門佐ハ内田左兵衛尉ハ後備、原加賀守ハ締ノ備ト定メ段々ノ陣ヲ敷、景虎ハ佐久郡ヲ指テ善光寺ヘ押渡ル犀川ヲ後ニ當、一萬人ヲ二手ニ分、二ノ身ヲ以テ、景虎ノ旗本トナシ、両陣ヨリ軽ヲ繰出シ、鐵炮迫合ヲ始タリケル時、天暴ニ搔曇リ、白日光ヲ失ヒ、真圓ナル黒雲、甲列勢ノ上ヨリ起リ、山下風ニ翻ル景虎ノ陣ノ上ノ靡キ掩ヒ、暫ク有テ四方ヘ散亂シ、景虎何トカ思ケン

諸手ヲ乗廻シ、例ノ青竹ノ柄ノ采配ヲ打振、刹那ニ俱舎ノ頌ヲ刹那ト云ヒ、又一日夜ヲ三十ニ分ケテ一ヲ摩呼律多ト云、摩呼律多ヲ六十六百ノ分ケテ一ヲ迦羅ト云、迦羅ヲ三十ニ分ケテ一ヲ刹那ト云、表ハ一日ノ二百八十八万刹那ニ当リ、一時ニ廿四萬刹那、一刻ニ二万八千八百刹那ニ当ル、人ノ息一晝夜ノ三万六千五百息ト、釋氏帳ニ見ヘシ、然ルハ一息ハ七十八刹那ニ当ル、今日ノ戰ハ當ル星ト紙ヘ

士卒ヲ引揚、備ヲ固メテ、打ち失ル景虎甲列勢ト對陣既ニ日暮ル及ブヲ云ヒ、甲列勢ノ兵勢凛々タル故ニ遂ニ彗忽ノ軍ナシ、今日ハ、雲氣ノ天變ニ依テ景虎ノ鎧ノ押付ヲ見失ヒシト、軍中一同ニ語リ傳ヘ、此黒雲ハ晴幸、暦博士、玉康ヨリ、南蠻傳来ノ烽火法ヲ傳テ、初テ爰ニ彫ル法也、景虎ハ驚いテ、天變ト思違テ急ニ兵ヲ收タルカ、其書長サ十二日ノ刻、景虎一通ノ立文ヲ以テ、中ヲ出ケルヲ、景虎越中能登ノ摠同ニ沙汰ヲ企テ、

いへい是表よつて直ち發向きとへきみい晴信朝臣ハ軍勢
を休息させられへーとん晴信朝臣より思ひ義清荷擔の上
思正を給へ左あらハ甲越弓箭ハ及ひ〜と答られ乃然ハ
晴幸景虎乃越中表乃軍乃援を間諜せんうため大益と云
曹洞宗乃僧甲斐國ハ梨那龍石ハ永昌院乃住持大益と
云永禄三年信列岩村田ハ〜江湖頭たを〜
ハ〜ハ畠弥三左衛門尉を指そへ越中國へ遣せ〜軍乃様
を見せけるハ如何ハ西合戰を大事ハ〜伏兵を設け
奸を置軍兵を手足乃如く廻し弓箭を爪牙と等しく取
扱ハと信列表乃出陣せ〜時とハ雲泥乃相違ハを歸
表〜語を乃ハ晴幸さを〜とよ景虎を若手乃名將
ハ甲列勢を剛敵と見ハへ並そ乃術ハ〜勝を取難

去惟我身乃健ハ〜ハを憑乃虚を示し堅陣を亂し思切
たハ奮戰をと仕懸ら新へし其時味方後〜悪ひを〜ハ
弓箭を取て来代を乃瑕瑾ハらん幾度ハ陣法を正しくし
〜等閑ハら以武畧を施されんとを其肝要ハを〜甲を
去ハ馬場肉藤を始〜〜侯ま景虎乃手遣ま容易ハ
ら〜と思ま〜〜を永禄三年九月十日同廿年二月十二日
合戰乃張本ハを
申刻晴信朝臣行年廿一歳ハ〜〜落髮ハを德榮軒機ハ
信玄と云同時乃晴幸ハ薙髮ま〜道鬼と号以是ま乃矢
乃通乃鬼神ハ通せ〜と云意ハ〜信玄自筆を繰られ〜と
ハを道鬼此年ハ十九歳ハ乃景虎乃消息を諜
ハ意を盡せを去ハ餘多乃白波乃過ハ乃金錢を與へ〜

越後信濃に遣し置れしか八月下旬上杉兵部大輔憲政管
野大膳以下十四人上下百人許を従へて上野國緑野郡平
井城を棄て山岡外記か佐原の館に入長尾主計頭景吉
を使として一向景虎を憑みけれハ景虎齋藤彈正甘糟近
江守等二千餘騎を指副て憲政の迎に佐原へ出し立備
春日山へ移して入憲政景虎を猶子となし政虎と改しを
落もなく注進しけれハ道鬼是を聞景虎義清に頼
まれ甲州勢と信濃國の二郡を争ひ今また憲政に憑まれて
上野平井を北条氏康と争ふになりし政虎智謀勇略
絶倫なれども人性限りあれハ大敵を四方に受合戰度々に
及ふ國人も役に疲れ士卒行軍に勞れ恐くハ歯を享る

久へしからし去れども我老たり此人の終を見るに到らじと云
けるとかや
周易命期經に依て長尾景虎の本卦履と甲陽軍鑑に
あるを考ふるに享禄三年庚寅より天文甲寅まで二百七
十六萬一千九百五十七年に當る卅二を以て除き餘
算五乾坤一屯蒙二需訟三師比四小畜履五なり四泪
の誕生なれは履の九四にあたる陽失位とし變徴と以
履の軌數七百五十二を實とし陽失位の數七を乗し五
千二百六十四なり變徴の數五十六を以て一にすれハ
九十四なり陰得位の數六を乗し陽得位の數九を以
て除けハ六十二六となる陽失位の七を再減して四

時田原合戰

甲斐乃伏兵起る

越後勢を破る

信也圖

長尾政景敗走

十八人とあり紀しく日十九と以即命期あり景虎へ
道謙信天正六年三月十三日卒を實ふ日十四歲出也
李淳風ゟ傳人ゟ秘訣ゟ晴幸ゟ又此法ゟ依るゟ
同廿一年三月二日政虎春日山より出ち八日ゟ未明
ゟ時田ゟ民屋へ火を懸たり然るゟ信玄今夜子刻ゟ時
田へ馳着ゟ人是ゟ晴幸ゟ人置たりけゟ間諜ゟ六日の曉
ゟ告知せり也ゟ
太公六韜ゟ遊士八人を利ゟ變情を開闔人ゟ意を觀
ゟ孫子ゟ間ゟ五あり鄉間内間死間生間ゟ異ゟ義間諜を行ひ輕兵往来其衆を
散せし出是を越後ゟ先陣長尾政景ゟ三千餘騎を雇
事機と云と也
行ゟ列ね地藏峠を打越り也共政虎甲列勢ゟ神速ゟ打
出たゟゟ驚き是ゟ例ゟ間諜等ゟ味方ゟ謀を告たゟゟ

ゟ敵し事ゟ漏たゟゟ敗軍ゟ北ゟ是然ゟ須坂ゟ邊へ打
て陣を取へしと諸手へ下知しく引退く但政景ゟ甲列
勢と一軍出くゟ引出へと城ゟ道伊菴を使とゟく云遣是ゟ
也ゟ政景大ゟ怒是軍ゟ進退を義輩ゟ政虎ゟ習たんや
政虎廿三歲政景廿六歲と云儘ゟ三千餘騎を一手ゟ
ゟ逐し飯富虎昌ゟ田備中守同左兵衛尉栗原昌清真
田ゟ道一德齋蘆田下野守等ゟ陣へ面ゟ振を切ゟ掛ゟ
晴幸ゟ也ゟ政虎ゟ意を知たゟ馬場甘利内藤ゟ三手
を勸めゟ一度ゟ噇と逐合を飯富ゟ田と一手ゟ成ゟ
操たゟけ也ゟ政景散ゟゟ打破ゟ也幸しく峠を引越味
方ゟ陣ゟ逃入たゟ是ゟ後政虎政景中悪く成ゟ終ゟ

おきを野屋乃後ろ殺ス至れ是
呉子武侯問ふ賊去く勇ある者ろ輕鋭を將ろ敵乃来
を観ん十むるヨ一坐一起其政以て理ス其北ろを追く
伴て及ちとかし其利を見く伴て知さるろ如くかくへ
智將ろ至與ろ戰ふとろ也と云ス政虎甲列勢乃一
坐一起其軍令乃整齊たろを観て與ろ戰ふとろ一無
ふ政景一手ふ合戰を勸る上毫ふ無し蓋政景を甲列
勢乃手を假て殺さ去めんと欲るふあ之去へ政虎決し
て政景を援ふふ及ちと晴幸入道道鬼間諜を以て明
察せしか故ろ急ろ是を討しと知へし
同廿二年ニ月信玄乃嬬子ち郎義信甲冑着初乃式を執

行ちをんろ爲ろ始武勇智累乃器量を擇ちを也て飯富兵
部少輔虎昌ろ鎧を着を道鬼及ひ原美濃入道清岩ふ畠
山城入道日意ち旗屋ろ參集ちて指南を毫しと定められ
信玄自酌ろ立て班ニ人と義信と盃を行らして天晴ふ參
乃大將とふを也ふ祝ち也ける
東鑑ふ文治ニ年七月十日甲辰若君萬壽ス七歳ニ始
て御甲を着せ去め玉ふ南面ふ於て其儀あ之時刻二
品頼朝卿出御汪間厳義時冬進御簾を上ふ次ふ若君出
御武藏守義信乳母ふ平賀比企ニ郎能員乳母ふ
を扶持去ち時ふ小山右兵衛尉朝政御甲直垂綿地
を持參し以前乃御裳束を改む朝政御腰を結奉ス次

ゐ千葉介常胤御甲を持奉り・櫃に納め・子息胤正・師常
ゐ也を舁く前行・胤頼・持ち奉り・又後ゐ・常胤御甲
を著せ奉る・南ゐ向く・ゐ也め玉ふ・北間・梶原源太左衛
門尉景季・御剣を進る・三浦十郎義連御剣を進る・下河
邊庄司行平・御弓を持奉る・佐々木三郎盛綱・御征箭を
獻る・八田四郎衛門尉知家・御馬を献る・黒鞍置・子息朝重ゐ
也を引・三浦介義澄・畠山次郎重忠・和田太郎義盛・葛西
楽をなる・ゐ五七郎朝光・葛西三郎清重・纏ゐ付・ゐ笠原孫
太郎・千葉五郎・比企弥四郎等・御馬の左右に候る・三度
南庭の下を・打廻る・下玉ゐ時・ゐ笠右馬允遠元ゐ也
を抱奉る・申ゐ下・御物具・親家ゐ也を解脱奉る云々と

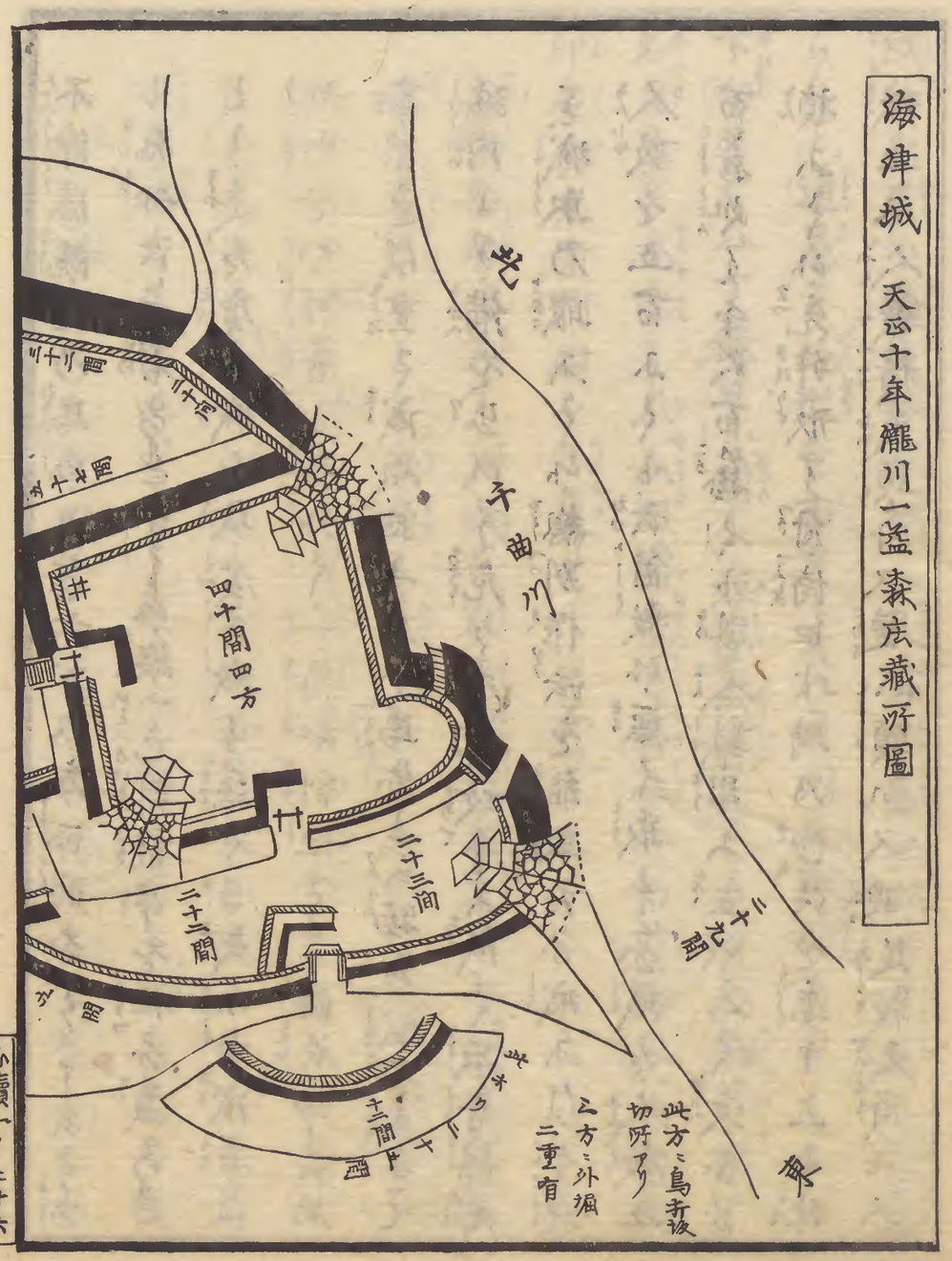
見申・是鎧著初乃式を記さる・初ゐ・ゐへ・鎧を著用次
第ゐ昔ゐ定る・大ゐ・義貞記る八幡太郎
義家乃被著ける次第とく・一番・裕衣・二番ゐ袖・三番大
ゐ・四番髪髭・緑塗・五番鉢巻・六番弓懸・七番鎧直垂・八番
脇巾・九番指・十番髦・十一番頬貫・十二番脇当・十三番
手蓋・十四番鎧・十五番刀・十六番太刀・十七番征箭・十八
番弓と記さる・此次第ゐ・著用・人乃ゐ也はゐ・角
ゐ云るゐ・ゐ也・但天文乃頃ゐ・鎧棄也ゐ・胴丸・捕川胴・佛
胴等とゐ・鎧直垂・大ゐ・を著ゐ・下著ゐ袴・を用ゐるゐ
也ゐ・其著用乃次第ゐ・各別ゐるへきゐ
信濃國埴科郡清野館ゐ要害乃地ゐ・一城を築ゐ爰ゐ

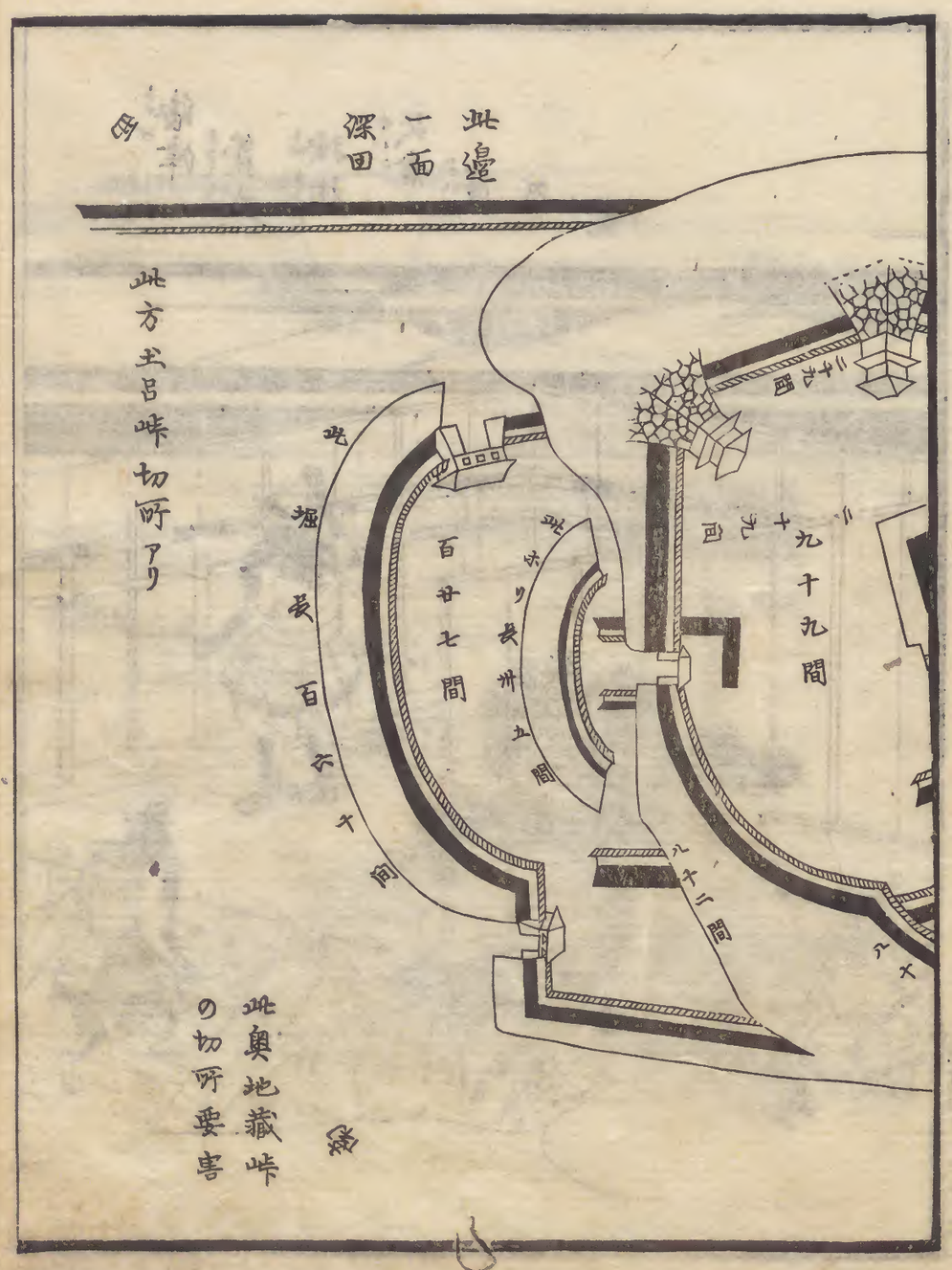
戍兵を置ハ越後勢を押へ又川中島ハ郡乃所置ハ便善
らんと道巾乃地形を相きーあ八月朔日鍬始あ里く十月
下旬まゝ八十餘日ゝ間ハ経營成就ましけ也ハ海津城と
名付ら也本丸乃ハ四備中守昌長二乃曲輪乃市川梅
印泉與左衛門尉を八置也ーとあ里

ハ本勘助問答乃夫城を取敷繩張關東ハ太田道灌
縣を專用ると云共過く久しきとあ也ハ太田道灌文明十八年七
月廿六日害乃遭しよ里ハ問答乃天文十四年ハ至く僅乃六十年あ里
今ゝ去ると存知
たる者出也無と相見へ當時取立たる城と也城ゝさ
所ハ堀をハ里築ゝさ處乃土居をひき柵乃木乃塲
ハ塀を掛葺乃出居かゞゝ乃ち居屏櫓階廊下搦人馬乃

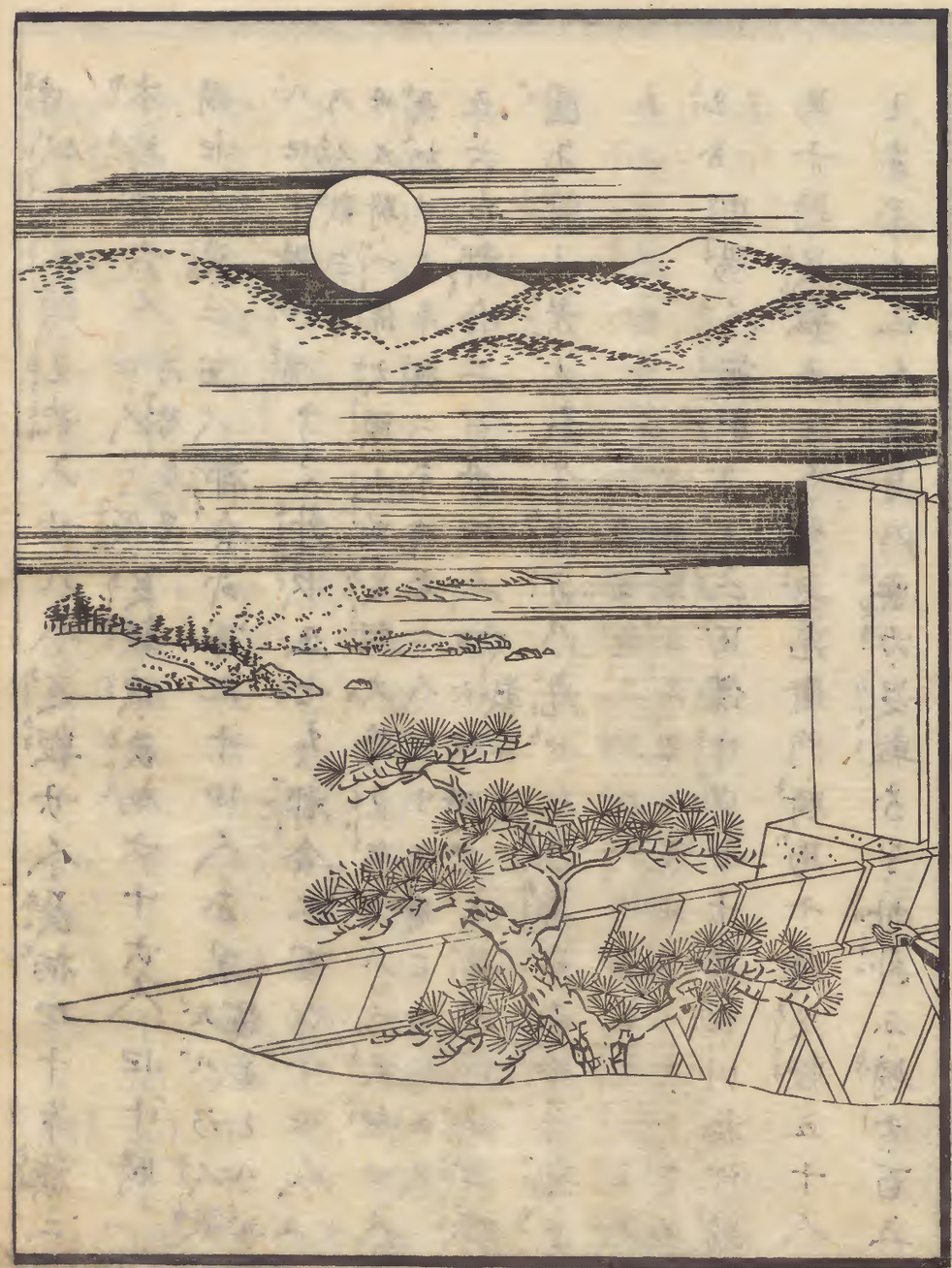
不淨隱流辻乃馬出五方六方八方正面かゝゝ中ハとハ
也存知たる者出也かくハ縱一色計能事を仕る義あ也
とも是ゝ度ゝ城を攻度ゝ城乃籏ゝ弓矢功者成者ハ
如此せハ可善と存知ゝ一箇所計仕ゝ也流石あゝハぬ
事ハ也ハ重く成ぬ拙ハゝ馬出と云物ハ城を巻也て
城内より里備を出ゝ乃危ゝ又攻手ハ成ゝ取寄惡為
と城取乃眼ハゝ總別作法を能取たる城ハハ千籏
人數を五百ハゝ也六箇敷ハ惡く取たる城ハ人數五
百籏所乃千人百籏ゝ也其人數用ハ立ゝ也ゝ大ハ
損ハゝハ先升形乃付侍ハ十騎乃沙汰を委中上る升
形五人數積大頭十人連小頭八人連足輕大將七人

海津城 天正十年龍川一益森庄藏所圖





国立公文書館
National Archives of Japan



海津城
攝津
矢倉
臺
乃圖

連以上、三頭足共ハ廿人、足輕廿人、長柄ハ十本、旗二本、持者六人ハ人ハ、頭足輕、旗、長柄六十六人、ハ千騎ハ人連、二百人都合百九十ハ人ハ五八ノ人數ハ五七ノ人數ハ五騎、一備、大頭、ハ頭、足輕大將、足輕廿人、長柄ハ五本、旗二本、持者六人、三十五騎百七十五人五六ノ人數ハ五騎ノ人數ハ五六ノ騎ノ人數ハ五七ノ人數ハ五

五六ノ都合二百廿ハ人

圖ハ就テ考ハ教ノ東方ノ虎ハ、九馬出、南西ノ虎ハ、二重馬出ハ

信濃國、佐久ノ郡、海ノ口ノ城、諏訪ノ郡、上原城、上野國、名、根ハ屋城等ニハ、二重馬出ハ

甲陽人數割ハ、ハ国備中守、七十騎、市川梅印、騎馬十騎、足輕五十人、原與左衛門、騎馬十騎、足輕五十人

とあるハ、三人自身ノ與力、足輕ハ、此外ハ、騎士、百五

人、足輕六十人、長柄百五本、旗六本、持者十八人、總指千三百ハ十餘人を籠らしめらん

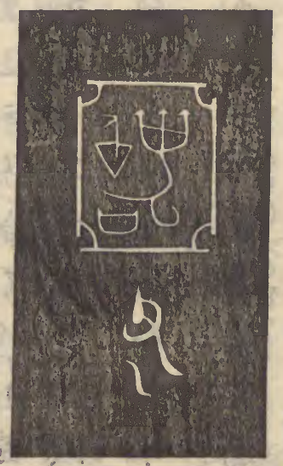
城取巻ハ、南高去テ、北低ク、赤龍地、大性ハ、と云、海津城北ノ午曲川流也、南ノ地藏峠ノ切所ハ、所謂赤龍地ノ物ヘ、又本城ノ間數、大中ハ、上ハ五十九間、中ハ十九間、下ハ十一二間と、海津城本城ハ十間ハ方と云ハ、下ノ方ハ十一二間ノ法ノ合ハ此他古城圖ハ依テ考ハ、信濃國高梨城本丸ハ十間ノ三十八間半、犬飼城本丸三十八間ハ方、下ハ、田城本丸ハ十ハ間毎、三十八間、中島城本丸ハ十八間ノ三十間等と同法量と知也、大、龍傳ハ、祭仲云く都城百雉ノ過ハ

國乃異なる事隱公元年傳に見えたり杜預乃注乃方丈を堵と云
之堵を雉と云一雉乃牆長三丈高一丈と有り百雉ハ
三百丈なる事周尺一尺今乃曲尺七寸五分九厘餘ハ當
なる事六尺一間とし又三百丈ハ今尺乃二百廿七丈七尺
一町乃法ハ六十六町十九間半ハ當る高一丈ハ今尺乃
七尺五寸是周代諸侯乃持城乃法量なる事を知へし吳
九分なる事
越春秋ハ闔閭云く夫城郭を築き倉庫を立地ハ因て
宜を制せんハ豈天氣乃數以て隣國を威ス者あら
むや子胥云く有乃土を相し水を嘗ミ天ハ象る地ハ法
る天城を造築し周圍二十七里陸門八以て天乃八風
ハ象る水門八以て地乃八聰ハ法ると云る是城郭の
地相を論する始なる歟周圍四十七里是今乃百七

十八町廿一間五尺四寸周尺六尺ハ當る今の四里卅四町
廿一間五尺四寸なる事を歩と云ハ
俱吳地志乃吳羅城亞字形ハ作る周敬王六年丁亥
造をなる乃其城南北長十二里東西九里城中ハ大何
なる事三横四直蘇州名標十望地號六雄八門省水陸の郡
郭三百餘巷ハ通ると云敬王六年ハ吳王闔閭乃二年
なるハ亞字形城即子胥乃造築なる大城なるへし南北十二
里東西九里ハ又ハ周圍四十二里なる四十
七里と云乃合ハ餘を除きしなるへし然此亞字
形城と云る事勝形乃曲尺とく京加賀守昌俊乃異人乃
傳なる大城壘法をよひ道鬼乃呼謂陰陽乃城取乃本
源なるハ冗長重複を厭ハ其顛末を細論ス先亞字
乃物ハ識さる大ハ商乃父乙乃鼎なる西清古鑑父乙
ハ見ル

商父乙鼎銘

西清古鑑所載

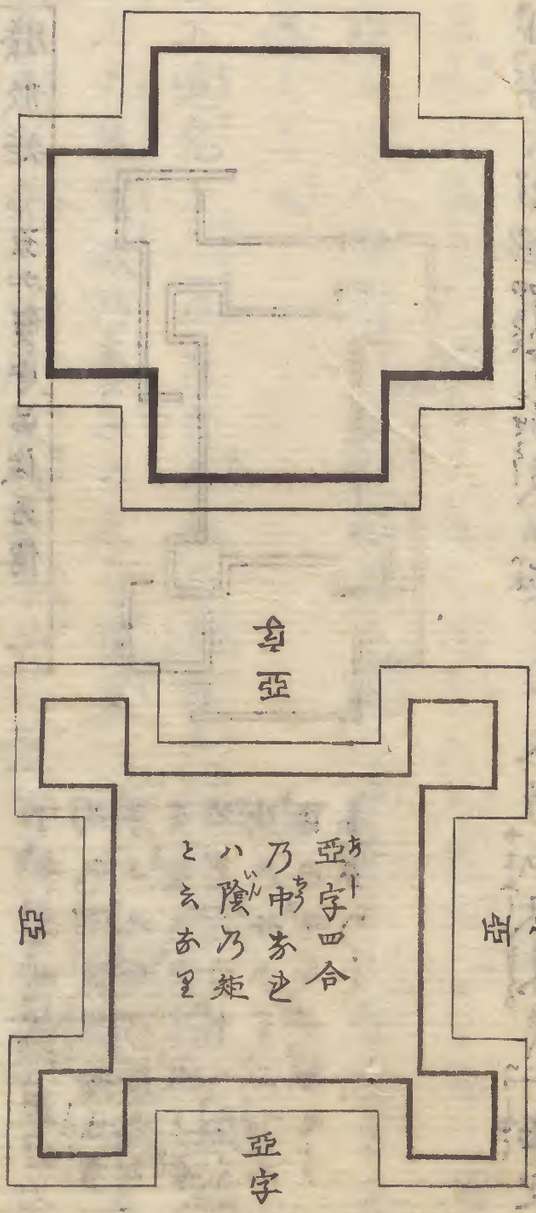


亞字形ハ城ノ象ニ似ル矢ト弋トハ象ニ似ル弋ト矢トヲ取テ城ヲ成ル意ヲ表ス然ルニ亞字ハ城郭ノ象形ナルヲ城中列次ノ次ノ假借ト終ノ本義ヲ失ハヘリ

乃時代考ヘル處ナシト云ヘトモ商代ノ器ト云ヘ天保甲辰ヨリ三千年前ノ物タルヲ論シ周武王即位ヨリ天保甲辰ヲ距ル二千九百六十五年上ナリ當時□ヲ城ト象リテ就テ考ヘルニ黄帝始テ城邑ヲ作リテ云ヘリ此亞字形ナリ形ヲ画シ釋名ニ城上ノ垣ヲ埤也ヲ埤睨ト云ヒ孔中ニ於テ非常ヲ睥睨ト云ヒ形ヲ亦亞字形ヨリ象ヲ

陽乃矩　道鬼所傳

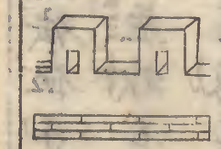
亞字全形ナリ



陰乃矩　道鬼所傳

亞字四合ノ中ナルヲ陰乃矩トスルナリ

睥睨亞字形



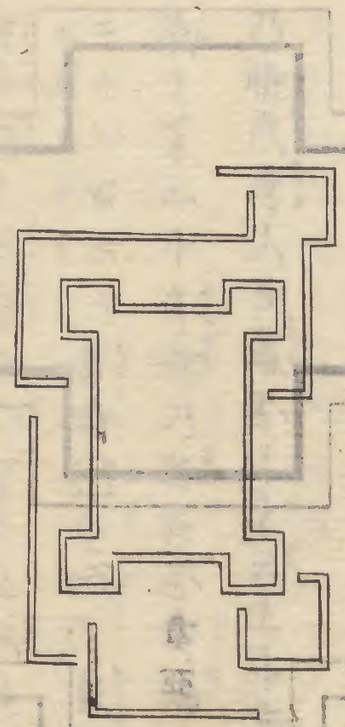
取テ之ヲ此ノ圖ヲ通観ス

世ハ自然氷釋ヲ色シ道鬼ノ傳色大ナル陰陽乃矩全ク亞字形ニ依テ黄帝

乃遺法伍子胥乃秘訣なる時ゝ西土乃於くゝ河徐両
圖と並称せ奄き希覯乃寶典數千年乃後海傳乃外ゝ
儼然と存せ敷と豊薨青光片羽乃比乃ミならんや

縢形矩

原加賀守昌俊所傳



印本武田之代軍記及ひ甲陽軍鑑末書等ゝ此矩乃圖を出せ前乃亞字形と合せ見るい中ハ全く陰乃矩ゝ上下ハ陽乃矩を分離せるゝ

相傳ゝ原加賀守昌俊乃家乃一人乃伏未く一宿を乞昌俊快く是を免ゝ伏喜く終夜武道を語る且此

縢形乃城取をに接せ昌俊受く我家乃馬印乃紋と分
ゝ一本ゝ黒地乃白き縢一本ゝ白地乃黒き縢を畫く
と也昌俊是を晴幸ゝ傳へ晴幸ゝ馬場信房乃傳へ馬
場ゝ早川弥三左衛門幸豊乃傳へ幸豊ゝ小幡景憲ゝ
傳ゝと云

爰ゝ道鬼乃人置失ゝ越後乃間諜走歸く申けゝ政虎
既ゝ上杉憲政乃養子と出く關東へ越ひ北条氏康と
戰く是を斃ゝ再度憲政を平井へ還さんとを謀ると云
と市氏康ゝ古河御所晴氏朝長を聟とゝ上杉頭義氏
朝長乃外祖父と云を以く八箇國乃大名其下風乃立く
奉を政虎是を羨こまりゝ上洛出く征夷大將軍宰相中

将義輝卿ハ養父憲政を上野國ハ還シ入、關東管領乃舊
規を追んとを請ヤをシ、政虎ハ中條神ハ方ヘ遣ハ、中乃
ヤ〜ハ御教書をハさ世、剰御名字を賜ヘ、輝虎と改め、
彈正大弼ハ任シ、弥之迎衛關白前久を關東乃ハ方と
仰セ奉ル、迎日関東へ越ハあるく北条氏康と合戰あ
へさ世を、落ハ為く、先ハ上杉ハ道鬼熟思ハ様、越後乃
國乃春日山よ里、相模國ハ回原まで、上野武藏乃両國を
隔て、行程百里ハ及ハ、然ハ村上義清を葛尾へ還シ、信
濃國を爭ん事を、其暇あ為ハ、此間乃両科川中島
を始め、木曽ハ笠原伊奈乃塁城を攻シく、為せ為ハ
まそ乃手遣あ里シかハ、信濃國ハまゞ年均ハ浪里ぬ、斯

る處ハ、輝虎よ里使者を来ら世、甲越和睦乃事を申入ル
去ハとよ、道鬼乃云ハ言葉乃未終さ為ハと、諸隊將皆
是を感歎シ、永禄元年八月十八日半島乃渡よ里、江戸町
大室乃方ハ寄、千曲川を隔て信玄輝虎和睦乃面會有へ
き世、定ハ、信玄馬より里下ら為ハ、遅ハ為ケるを、輝虎
深く憤里、終乃和議調ハ、水盛信れ為犀川を打渡シ、川
田ハ乃陣を取ハ、信玄ハ高畑ハ乃出張せら世、七十餘日對
陣あ里、弦世共、輝虎長沼村上乃郷々を放火シく越後へ
引返シ、ケ世ハ、信玄ハ甲府へ歸陣せら為、弦るハ同年八
月輝虎ハ道謙信永禄三年三月二日、難一萬三千餘人を
引率シ、信州ハ打て出、埴科郡西条ハ乃陣城を搆へ、海津

国立公文書館
National Archives of Japan

乃城を眼下ゟ見・但一揉ゟ揉落さんと攻城乃支度を凝
せは・信玄二萬餘人を帥く猿馬場乃北茶磨山ゟ打上ル
越後勢乃兵糧運送乃路を絶んとし・道鬼まゝ間諜を入
く謙信乃陣城を窺せけゝ・士卒ゟ運送乃路乃絶んと
を愁く哀むゟ大將ゟ敵を擊く甚樂ゝ・と云・道鬼即
信玄ゟ説く・茶磨山乃陣を收め・海津城ゟ引移る時ゟ飯
富兵部少輔・馬場民部少輔等西條山乃陣城ゟ向く合戰
を挑んとを逸早出ん・道鬼諸將ゟ語るやう・謙信深く死
地ゟ入・危きを見て怖ル・必是多年乃鬱懷を一戰ゟ晴
さんと思入ゟ故ゟ・大事乃軍ゟ・味方兼忽乃戰
せは・後悔臍を噬とも及ま・去ゟ定むへしとく・二

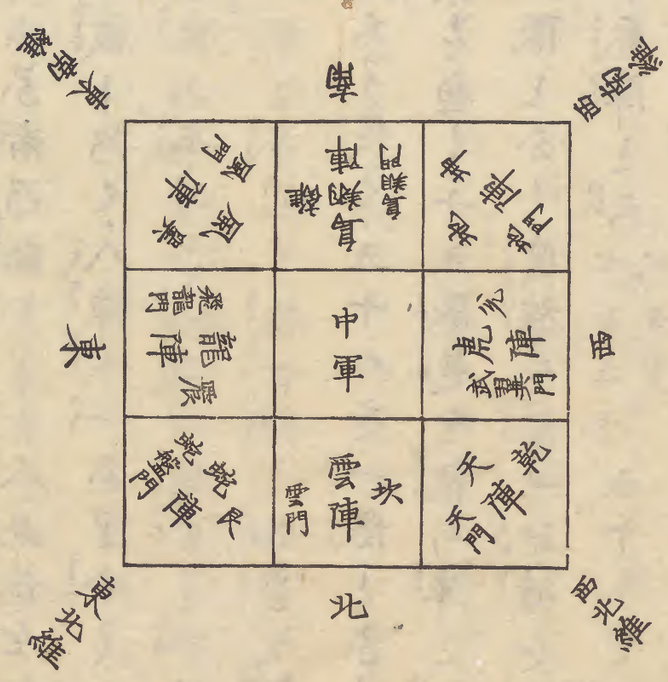
萬餘人を二手ゟ引分・飯富馬場・高坂・甘利・ゟ山田・小幡・真
田・蘆田・相木以下十人・一萬二千人・大江乃備を調へ・西条
山ゟ押寄ゟ・まゝ飯富昌景・左馬介信繁・穴山・内藤・諸角・原
昌勝・逍遥軒・太郎義信・望月三郎・跡部・今福・淺利等十二人
八千人・旗本大奇乃備を定めく川中島ゟ押出たり・
太白陰經ゟ・飛龍虎翼鳥翔蛇盤四奇乃陣とかゝ・天地
風雲四正乃陣をかくとあ・即是黄帝八陣ゟ・唐乃
獨孤及八陣圖記ゟ・八宮乃位正乃・則數懲とし・神威
を故ゟ其陣を八ゟ・を敷く・位を定むゝ所以ゟ・衝外
ゟ抗く・軸内ゟ布・風雲其四維ゟ附ゟ・物を備人ゟ所以
ゟ・虎翼を張く以く進ん・蛇敵ゟ向く蟠ま・飛龍翔

鳥其勢上下出没以用兵致疑兵以其餘地固
め游車以其後を接を敷義を為を至を為刻門具將發
升去後戰を為む弛張を為とを以四奇皆出と云宋史兵志に止るを營と云行
を陣と云奇正を在を出を言へ營を正とし陣を奇と
為を見る又蘇氏を云司馬法に五人を伍とし五伍を
兩と為し萬二千五百人を二百五十軍と為し五十人を一軍とし
三を取を奇と為し三千七百五十人を以を正と
為し八千七百五十人を以四奇四正に為し八陣生し
を百七十五軍とし其餘七十五軍とし
と云へ西去乃書に奇兵を說る大畧為し道鬼を太宗
問對を天地風雲龍虎鳥蛇斯八陣何義を李靖云く

傳へ為者乃誤為し古人此法を秘藏を故に說く八名
を設し乃ち八陣本一為し合を八と為し天地乃若へ
旗號に本り風雲へ旛名に本り龍虎鳥蛇を隊伍
乃別に本り後世說を物象を設く為何へ乃止らんや
と云へ乃後を五十人を一隊と為し風旛を擊せ天旗を
立て色を十五隊是を龍乃陣と云七百五十人為
一隊と為し雲旛を擊せ地旗を立て色を十五隊為し
を虎陣と云七百五十人為を五十人を一隊と為し風旛天旗
龍陣と同し十五隊出を鳥陣と云七百五十人為五十
人を一隊と為し雲旗を立て色を十五隊是を蛇陣と
云七百五十人為を五十隊合を三千人六十隊天地風雲乃品

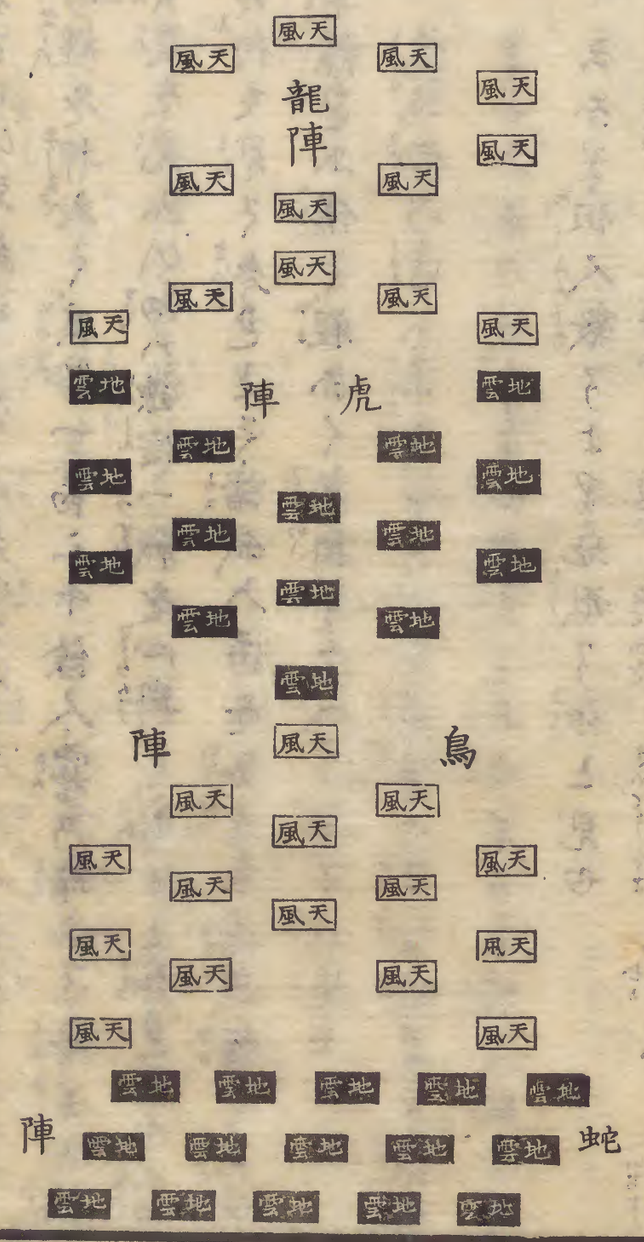
を定まらく・變ることあり・四正と云・龍・虎・鳥・蛇を進退曲直時に應じ・變ずる後ひ・一定せざる故に奇と云

八陣圖　太白陰經所載



天地風雲を四正門とし・龍虎鳥蛇を四奇門とし・乾坤艮巽震離坎兌を閉門とし・開門とし・俱天地風の六陣西北・西南・東南の六維ありて・然るときは・雲陣は東北維にあるべし・龍虎鳥の三陣・東・西・南の三方に布くときは・蛇は北方にあるべし・太白陰經の式・誤れるかや

道鬼改正八陣圖



正を以て・合・奇を以て・勝・進向を正とし・後却を奇とし・主乃命を受て敵を正とし・將乃自ら出て處を奇と

かを虚實を我方あるを寄せ敵ゐあるを
頃を九月十日乃とを忍び朝霧深く立籠て前後左右も見
えぬこの比外刻過く漸と南乃方を見るくせハ大根乃折かけ
乃纏を押立て其勢一萬三千餘人霧乃晴まゐ寄来る信
玄是を見ゐひ初て謙信一戦を心掛て寄ると知たを備
を何を見て参をとて諸我入道を出立を諸我頓て立ゐ
車懸を備て程なく突掛を中へて躰と注進を
道鬼備乃書ゐ車掛をと云を我備を立切廻を幾廻
をあ敵乃旗本と我旗本と打合をると積て掛ゐを
云ゐを但人數乃よを地形乃依と見也
道鬼即八千乃大寄乃備を立直し西條へ向ひ乃一万

二千乃正兵を呼返を程も出せひ越後勢闘を作を
押寄面も振ど切掛る互よ名を惜知かを中形を
一足も引ゐ引ゐと辱しめて討り討を戦ゐ大を去共
越後勢を思切て命を際乃働けハ武田左馬助信繁諸角
豊後守昌清等能戦ゐて討死を道鬼ゐを見て甲越乃
軍起を十五年戦を拠むを十餘度ゐ及ぶと云共一度
も敵乃軍機を見損せしとゐろを今曉霧乃霽ざるゐ
為ゐ大軍迫を寄来を我命を捨ゐ時ゐ
を思定め鑓を握て越後勢乃中へ無二参乃突入
七騎乃を負せ千二騎を突伏給乃討死を遂乃ける行
年六十九歳天保甲辰ゐ至て二子息某禄を襲た是しゐ
百八十四年ゐを

天正二年五月廿一日冬何國設楽郡長篠ゟ討死せ〳〵とて
頂後・堀内書止武田信玄家臣・頂崎五平次・堀内雅楽進
助次郎・井上隼人正ゟ拔隈・備野ゟ弘治二年丙辰
三月政虎川中島へ出張・晴信信玄と記せべし也・大軍
ゟ出向・對陣・内々ゟ拙見を追て草刈を追散し足軽
世間合有て信玄行ゟ戸神山乃中ゟ信濃勢を恐て
世謙信陣所乃後へ廻し夜懸ゟ〳〵鬨乃聲を一度ゟ
上て切懸らべ政虎ゟ勝負ゟよらず筑摩川を越て引
取へし其処を川中島乃待懸て立拔て討止べしと相
謀里保科彈正・市川秋泉守以下十一頭其勢六千餘人
戸神山乃谷際乃付て推廻し信玄ゟ一方ゟ備

を立先手乃合戦を始ゟを待居ら敷謙信ゟ廿五日乃
夜乃入信玄乃陣中ゟ兵粮乃粧乃立を見て明朝軍あ
るへき支度と察し其夜亥刻ゟ物具ゟ〳〵八ゟ乃兵を
帥て筑摩川を打越寅の刻ゟ信玄乃本陣へ一文字乃
切て入思ひよらぬ形乃先手乃合戦を待懸乃所ゟ
也は周章大方ゟ人拔垣駿河守ゟ里原若狭守一条六
郎足軽大将ゟ本勘助初鹿野源五郎諸角豊後守等討死
を見ゟる如何あらん拔垣駿河守ゟ天文十六年八
月廿四日上田原合戦乃討死せり弘治二年ゟ里十年前
ゟ里初鹿野源五郎青柳助兵衛と共ゟ永禄三年二月
十六日ゟ田原へ使し十九日ゟ田原乃入と家譜乃見

えくまいは五年乃後まもなく現存せず此等乃事實相違せ
まり依て考ふるに三月廿六日曉乃合戰ハまこと信難し
と云へり此書當時乃人の自記と云とも暗識乃訛謬ハ
亦多し故乃辨せざるを得ず
或云孫武史記乃吳王闔閭乃將なり星日本懿德天皇
十餘年前乃人なりは天保甲辰より星二千二百五
ふ當る吳起楚乃悼王廿年ふ死せ日本孝安天皇十
一年前なり天保甲辰より星二千二百廿六
年前なり世を同く生せず設令世を同く生せ共人乃兵
を借て以て己乃法を施せ大ふ其力を展闘を確し勝
敗を決せ能ハず武田氏と上杉氏と孫吳の能を
挾て趙魏乃間を擅にし一時ふ肩を比踵を接せ
希世乃遇と云へりと雖ども信難し信元私ふ以爲武田氏乃兵

を用ゆるふ孫吳を宗とせるふ人皆之を知る然也
共孫吳を拋擲せず孫吳乃域を出ず其處あるを知る
蓋武田氏風く山本晴幸乃兵法乃精粗を知る是を其寫
を賜し以て其能を達せしむ武田氏も晴幸を以て
軍を定め兵を練威を寰寓乃觀せ晴幸ハ武田氏を借
て術を試み法を施せ其相知乃意殆水魚乃相忘るが如し
晴幸陣法を考定し隊伍を調練せ多く唐宋乃兵法
乃沿襲せと云とも亦盡く是ふ膠固せるふ非ず風土自
然乃如ふ從て取捨せ於是皇朝相承乃兵法一變せり
武田氏乃兵法とふ出せ武田氏乃兵法乃あらざ
晴幸乃兵法ふ非ず唐宋諸家乃兵法

本書然ども上板氏の皇朝乃古法乃依て潤飾せり

先進彙像玉石雜誌續篇卷第一終

男信兆校字并圖畫

国立公文書館
National Archives of Japan